

資料紹介

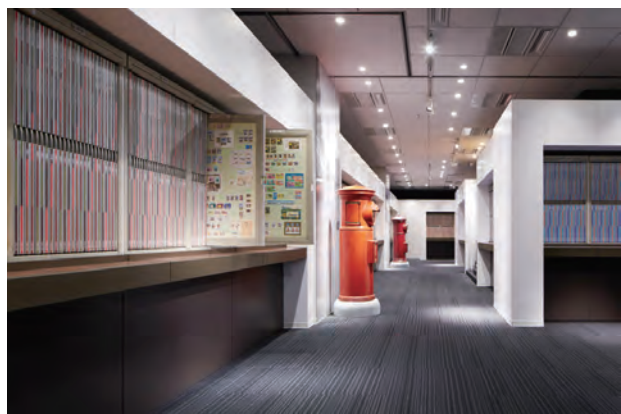
# 万国郵便連合（UPU）送付外国切手コレクション —展示什器の変遷を中心に—

倉地 伸枝

## はじめに

当館は2022（令和4）年で創立120年を迎えるが、館活動やコレクションの歴史については、未だ十分に明らかになっていないことが多い。

万国郵便連合から送付される外国切手はそのひとつである。19世紀末から膨張し続け、今日では日本切手も含め約185万枚にも達した驚異的な規模の資料群にもかかわらず、これまでその実態については十分な関心が払われてこなかった。各時代の収集、整理保存、展示については1977（昭和52）年刊行



【図1】 郵政博物館常設展示場、フォワードストロークにより2014（平成26）年撮影

の『通信博物館75年史』<sup>1)</sup>各章にはじめて概況が示されたが、その後研究の進展はみられず、全体像が十分に描き出されないまま今日に至っている。

本稿では、19世紀末に当館がこのコレクションを有することになった経緯と、その後1960年代初頭に至るまでの展示状況に焦点を当て、以下の3章から検討していきたい。

第1章では、この万国郵便連合による切手交換の制度がいつ何の目的で創始され、日本がどのように切手の送付を受け入れ管理してきたのかを、海外の先行研究等から概観する。第2章では、連合送付切手がいかなる経緯により博物館で活用されることになったのかを、当時の起案文書から明らかにする。第3章では、博物館がその理想的な展示方法を模索し、専用什器の考案や改良にどのような工夫を重ねてきたのかを、同時代の写真や図面、文書資料からたどりたい。特に、膨大な量の切手を適切に展示するための什器は、現在当館が使用している「引き出し式ケース」<sup>2)</sup>【図1】に帰着するまで、先人たちによりさまざまな試行錯誤が行われてきた。本稿は館史のあらたな側面に光を当てるとともに、「ケースについて技術論的な論考は意外と少ない」<sup>3)</sup>とも指摘される博物館展示論の分野に対し、一事例研究として寄与することを目的と

1 通信博物館編『通信博物館75年史』信友社、1977（昭和52）年。

2 前身である通信総合博物館から受け継いだもので、1964（昭和39）年の大臣官房資材部用品研究所による設計をもとに、その後更改を加えながら配備されてきたもの（上掲、249-251頁、『用品研究所年報 昭和52年度』郵政大臣官房資材部、8-13頁）。現在、およそ33万枚の切手がケース本体に収納された額面に国別・年代順に貼り込まれており、来館者はこれを引き出して自由に観賞できる。

3 杉山正司「展示技術論史」、青木豊・鷹野光行編『博物館学史研究事典』雄山閣、2017（平成29）年、277頁。

する。

## 1 万国郵便連合よる切手交換

### (1) 制度の創始

当館の外国切手コレクションは、万国郵便連合が媒介となり、加盟各国の新発行切手を定期的に交換するという制度により今日まで収集されてきた<sup>(4)</sup>。だが、そもそもこの制度はいつどのような目的で始まったのか。国内では1979（昭和54）年刊行の『日本のみほん切手 明治・大正編』<sup>(5)</sup>に簡単に言及されるほかほとんど先行研究が確認できないが、イギリスでは1960年代から当該分野の研究が蓄積され、近年ではベンドン氏の『UPU見本切手 1878-1961年』（2015年）と補遺（2021年）に、その最先端の成果を見ることができる<sup>(6)</sup>。

同氏によれば、この制度は1878（明治11）年にパリで開催された「第2回万国郵便大会議」において決定され、同会議で採択された条約の「細目規則」第29条にはじめて明文化されたという<sup>(7)</sup>。この条文の仏語原文、英訳、邦訳は、太政類典に収録された小冊子『万国郵便連合 巴里条約』に見ることができるが、その「第二十九条 総理局へ通報ノ事…二 連合ノ各駅通局ハ総理局ノ媒介ヲ以テ互ヒニ左ノ諸件ヲ通知スベシ」のなかに、「第四 郵便切手一揃」（La collection de leurs timbres-poste）が確かに含まれている<sup>(8)</sup>。その目的は条文中に明記されていないものの、先行研究は一律に、正式に発行された切手について加盟各国が情報を共有することにより、偽造切手の流通を阻止するためであったとの見解で一致している<sup>(9)</sup>。確かに、この条文がほかに提出を求めた項目を見ると、「第一 …増税ヲ課スベキ国及ビ其増税ヲ課スル線路」や「第三 書留到達証ノ見本」など、いずれも外国郵便の運営上、情報共有が不可欠な実務資料としての性格を有している。今日、万国郵便連合はこの切手交換の意義として、各国の切手製造技術やマーケティング力の向上、ひいては郵趣振興をも挙げている<sup>(10)</sup>が、おそらく制度が始まった当初は文化交流促進の意図は薄く、偽造切手の摘発という実務上の目的に限られたものであったと考えられる。

- 
- 4 万国郵便連合（UPU、仏：Union postale universelle、英：Universal Postal Union）。1874（明治7）年に創設、1948（昭和23）年より国際連合の専門機関として国際郵便をつかさどる。切手交換の制度は今日まで続いており、毎年4,000枚以上の新発行切手が連合事務局から日本郵便株式会社に送付され、日本郵政株式会社を通じて郵政博物館に貸与されている。
  - 5 山本義之『日本のみほん切手 明治・大正編』関西郵趣連盟、1979（昭和54）年、201頁。ただし、当該箇所には典拠が示されず、海外の先行研究に照らして不正確と考えられる箇所が見られる。例えば、切手の配布数は「その国の持つ議決権数に応じ…日本は加盟当初4組」だったと説明されるが、配布数は国によらず一律である（註15参照）。
  - 6 Marcus Samuel, 'The Distribution of "Specimen" Stamps by the Universal Postal Union', in *Stamp Collecting*, vol. 103, between 4 December 1964 and 5 February 1965; James Bendon, *UPU Specimen Stamps - The Distribution of Specimen Stamps by the International Bureau of the Universal Postal Union*, Limassol, Cyprus: James Bendon, 1988; idem, *UPU Specimen Stamps 1878-1961*, Abingdon: Oxford Book Projects, 2015 (Bendon, 1988の増補改訂版); idem, *UPU Specimen Stamps 1878-1961 Supplement-2021*, Abingdon: Oxford Book Projects, 2021.
  - 7 Bendon (2015), *op.cit.*, p. 17.
  - 8 「万国郵便連合 一千八百七十八年六月一日 パリスニ於テ締結ノ条約実施ノ為メ 細目規則」『万国郵便連合 巴里条約』、77-80頁（太政類典・第三編・明治十一年～明治十二年・第四十四卷・運漕・陸軍郵便二「万国郵便聯合条約並切手ハカキ新製附万国郵便聯合巴黎条約並細目規則同附録及追加」収録）。
  - 9 Samuel (4 December 1964), *op.cit.*, p. 477. この見解は、Bendon (2015), *op.cit.*, p. 17や郵便ステーションアリー連合協会（UPSS）公式ホームページ（<http://upss.org/upuspecimens/upuprocedures.php> 2022（令和4）年1月2日最終アクセス）においてもほぼ一言一句踏襲されている。
  - 10 万国郵便連合公式ホームページ（<https://www.upu.int/en/Universal-Postal-Union/Activities/Philately-IRCs/Philatelic-bulletins> 同上最終アクセス）。

## (2) 日本の受入・管理状況

1877 (明治10) 年に万国郵便連合に加盟した日本は、翌年の第2回パリ大会議にもはじめて代表を派遣し、同年6月1日には条約に調印を果たしている<sup>(11)</sup>。先行研究によれば、1883 (明治16) 年2月に至るまで日本が連合総理局に公式に切手を提出した記録は見られないものの、加盟各国の郵政当局に対してはそれ以前から直接切手類の送付を行っていた形跡があり、早くから世界的な切手交換の取り組みに参画していたと考えられている<sup>(12)</sup>。

では、日本は連合総理局や各国から送付された切手を、どのように管理していたのか。1892 (明治25) 年に郵務局計理課物品掛長に着任し、その後当館の創立と発展を牽引した樋畑雪湖 (1858-1943) は後年『日本郵便切手史論』のなかで、「明治十年 [ママ] 以後郵便連合同盟国の郵政庁からして送付して来つた」切手は、「強質なる糊を以て美しい厚紙で出来たアルバムへ、何れもベタベタと貼付けた」「真贋鑑定用の切手貼付帖」に保管され、その数は1923 (大正12) 年の関東大震災で焼失するまで20余冊に及んでいたと振り返っている<sup>(13)</sup>。また、この切手帖は「駅通寮 [ママ] の外国郵便係時代から貼付し来つたもの」と述べ、外国郵便の所轄課<sup>(14)</sup> がその管理を担当していたことを示唆している。日本の郵政当局は連合送付切手の真贋鑑定資料としての役割を理解し、外国郵便の実務に際して円滑に利用できるよう、切手帖の形態で丹念にアーカイブ化していたと考えられる。

一方、樋畑は同書のなかで、この切手帖に「貼残されてあつた糊付袋入の残品」の存在も指摘している。切手交換の始まった当時、連合から各国に送付される切手の部数は1種につき1部であったが、その後の大会議で度々変更が生じ、1886 (明治19) 年からは3部、1892 (明治25) 年からは5部と増加したのち、1907 (明治40) 年からは再び3部に減じている<sup>(15)</sup>。上述の切手帖に各切手を1部ずつ貼付したとすれば、1886 (明治19) 年以降、時期により2部または4部の残数が生じることとなる。1898 (明治31) 年3月2日付の起案文書<sup>(16)</sup>によれば、樋畑は1891 (明治24) 年にウィーンで開催された「第4回万国郵便大会議」の翌年から、切手類が「一種ニ付五組ツツ見本トシテ本邦へ回付」されていることを把握しており、このうちの残数が「空シク当局ニ貯蔵」される状況を知っていた。

日本は連合から受け入れた切手のうち、少なくとも1部は真贋鑑定用として切手貼付帖に保管した一方で、残部については袋に入れたまま死蔵していたようである。次章では、この残部をめぐって、活用の道が模索された経緯を見ていきたい。

## 2 連合送付切手の活用

### (1) 東京郵便電信学校への移管

上述のとおり、樋畑は1898 (明治31) 年3月の文書のなかで連合送付切手の残部に言及して

11 山口修『外国郵便の一世紀』国際通信文化協会、1979 (昭和54) 年、61-64頁。

12 Bendon (2015), *op.cit.*, p. 241. 各国郵政当局に対する直接の送付は、明治中頃以降にも度々行われていた (『郵便創業期の記録 郵便切手類沿革志』郵政省郵政研究所附属資料館、1996 (平成8) 年、5-12頁)。

13 樋畑雪湖『日本郵便切手史論』日本郵券倶楽部、1930 (昭和5) 年、197頁。

14 外国郵便所轄課の変遷については、通信省編『通信事業史 第一巻』財団法人通信協会、1940 (昭和15) 年、63-64頁。

15 Bendon (2015), *op.cit.*, p. 488. その後約100年間は3部のまま変更がなかったが、2008 (平成20) 年から1部に減数し、今日に至っている。

16 「万国連合郵便切手類見本配分ノ件」(郵庶甲第254号、1898 (明治31) 年3月2日立案)、文書綴『明治二十五年起 万国連合郵便切手類取扱書類 通信局郵務課』(AKA-11) 収録。

いるが、筆者が調査した限り、その存在に初めて着目し、活用を試みたのは東京郵便電信学校（以下、郵電校）の第四代校長・湯川寛吉（1868-1932）【図2】である。湯川は樋畑より2年早い1896（明治29）年6月、通信局長心得の鈴木大亮に対して「本校ニ備付常ニ生徒ヲシテ閲覽セシメ」るため、「本邦ト条約アル外国郵便切手類」「各一ト通」を交付して欲しい<sup>(17)</sup>と依頼している。

湯川は1895（明治28）年8月に弱冠27歳で同校校長に就任し、1903（明治36）年に退任するまでの8年2か月にわたりその改革を推進した人物である。湯川は、当時実務重視に傾いていた同校の教育方針を見直し、行政科では法学や経済財政学ほか、英・仏・独の3か国語を含む15科目を課すなどして「高等の學術を修めたる、中堅吏員」の育成を図った<sup>(18)</sup>。生徒に幅広い知識教養を習得させようと努める湯川の目に、世界各国から送付される切手が格好の教育資料として映ったことは想像に難くない。

だが、そもそも湯川が連合送付切手に目を向けるきっかけは何だったのか。実は彼は通信局に対して切手の交付依頼を行う3か月前の1896（明治29）年3月、自らが同局の「庶務課長兼外信課長」に着任していた<sup>(19)</sup>。外国郵便の所轄課が連合送付切手の管理を担っていたことは前章でみたとおりだが、湯川は同課長兼務となってもなくその一部が死蔵されている状況を知り、前年より校長を務める学校の教材として活用することを思いついたのではないだろうか。

その実現のために湯川がとった行動は、郵電校校長として通信局に対し依頼文を送るにとどまらなかった。同年11月、今度は通信局「外信課長 湯川」の立場で「東京郵便電信学校へ外国郵便切手類送付案」<sup>(20)</sup>と題された文書を起案し、郵電校に対して4,283点の切手類を送付してよいか伺っているのである。湯川は自身が校長として依頼した内容に対し、今度は通信局の外信課長としてこれを推進したことがわかる。『通信事業史』は彼を、「新進気鋭の逸材にして、夙に内外の事情を察し…常に国家的立場より通信事業の拡張と改革とに腐心し、在職中終始重要な地位を占めて、着々之を実現した」<sup>(21)</sup>と評しているが、この一連の行動にも、その鋭い着眼点や圧倒的な実行力が発揮されている。

この文書は同年12月6日付で決裁となっており、湯川の提案どおり4,000枚以上の切手類が郵電校に移管されたとみられる。また、同じ文書綴（AKA-11）には翌1897（明治30）年の11月と12月にも同様の送付が行われたことを示す文書が残っており、この計画はある程度の継続性をもったようである。郵電校における活用の実態は明らかにできなかった<sup>(22)</sup>が、これが湯川の計画どおり「常ニ生徒ヲシテ閲覽セシメ」られたのであれば、連合送付切手が外国郵便所



【図2】「湯川寛吉第4回〔筆者註：第5回〕万国郵便大会日本代表委員」、撮影年不詳（ZAD-37）より部分

17 「東京郵便電信学校長湯川寛吉」発「通信局長心得男爵鈴木大亮」あて依頼状（乙第170号、1896（明治29）年6月16日付）。本稿では「東京郵便電信学校へ外国郵便切手類送付案」（註20参照）に添付された写しを参照。  
 18 通信同窓会編『通信教育史』通信同窓会、1984（昭和59）年、144-145頁、前掲、『通信事業史 第一巻』、639頁。  
 19 校長着任当時は通信局「総務課長」、翌年3月の総務課廃止に伴い、同局「庶務課長兼外信課長」を兼任（『通信省職員録』内閣官報局、1895（明治28）年、429頁、同1896（明治29）年、489頁）。  
 20 「東京郵便電信学校へ外国郵便切手類送付案」（通外乙第578号、1896（明治29）年11月4日立案）、文書綴『明治二十五年起 万国連合郵便切手類取扱書類 通信局郵務課』（AKA-11）収録。  
 21 前掲、『通信事業史 第一巻』、639頁。

轄課外で初めて公開された機会に位置づけられる。本来は実務資料に過ぎなかった連合送付切手に対して湯川が教育上の価値を見出したことは、博物館設立構想を温めていた樋畑を刺激し、より広く活用の道を模索させる契機となったと考えられる。

## (2) 郵便博物館等への移管

この湯川の計画から2年後の1898(明治31)年3月2日、郵務局計理課物品掛長の樋畑が「万国連合郵便切手類見本配分ノ件」<sup>(23)</sup>と題された文書の立案を行う。樋畑は1892(明治25)年より各5部が送付される連合切手について、「一組ハ当局原簿ニ貼付致シ、又一組ヲ東京郵便電信学校ニ配布」されるものの、「其ノ残余(三組)」は死蔵され、将来的には「糊着毀蝕其他罹災等」により「全滅」の恐れがあると警鐘を鳴らしている。さらに同文書では、これを回避するため、従来の貯蔵分と今後の受け入れ分を適

【図3】「万国連合郵便切手類見本目録」より部分  
(出典は註16参照)

当な諸機関に配分し、活用を図ることを提言している。その配布先には、「将来開設スベキ郵便博物館」「大蔵省印刷局」「帝国博物館」「帝国京都博物館」「帝国奈良博物館」の5か所を挙げ、具体的な内訳案を別紙の「万国連合郵便切手類見本目録」【図3】に示している。この目録の上段では、各国から送付される切手類を切手、葉書、往復葉書、封緘葉書、封皮、帯紙の6種<sup>(24)</sup>に分け、発行国名と種別の交わる区画内を4分割し、右上に印刷局、右下に帝国博物館、左上に京都博物館、左下に奈良博物館への配布枚数を漢数字で記入している。例えば冒頭の日耳曼(ドイツ)送付切手については、印刷局へ24枚、帝国博物館へ25枚、京都博物館へ5枚、奈良博物館へ6枚の配布が計画されている。また、「郵便博物館備用」については下段に別欄が設けられ、切手48枚、葉書12枚というように、種別ごとの枚数が記入されている。目録末の集計には、切手だけでも郵便博物館へ4,266枚、印刷局へ3,024枚、帝国博物館へ3,021枚、京都博物館へ531枚、奈良博物館へ532枚もの配分計画が示されており、随所にみられる訂正の跡からも、その調整作業の労がうかがえる。また、長く死蔵された切手類のなかにはすでに「糊着毀損其他虫害等ニ依リ滅亡シタルモノ」もあったといい、この目録作成にあたっては机上の計算にとどまらず、現物の状態確認にも手間を要したことがわかる。

この配布計画は決裁後、速やかに実行に移されたい。印刷局、帝国京都博物館、帝国奈良博物館への寄贈実態には迫れなかったが、帝国博物館に対しては1898(明治31)年6月20日付で「173か国及び地域の3000点以上」の切手類が寄贈されたことが、東京国立博物館に残された記録から明らかにされている<sup>(25)</sup>。

22 1901(明治34)年5月に開室した図書閲覧室には、かねてから購入されていた一万巻以上の洋書・和書が学生や教官の閲覧に供されていた。連合送付切手もここに配備された可能性が考えられるが、定かでない(前掲、『通信教育史』、151-152頁)。

23 註16参照。

24 「細目規則」第29条(註7,8参照)において提出が要請されたのは「郵便切手」のみであったが、実際には葉書などの「ステーションナリー」も交換の対象となっていた。なお、この慣行は1964(昭和39)年の第15回ウィーン大会議で正式に廃止された(Bendon(2015), *op.cit.*, p.18)。

樋畑はこの各機関に対する配布計画の目的を、「学芸上御参考トシテ」と明記しており、後年の文書<sup>(26)</sup>では切手を「図案意匠等ノ標本ニシテ版式其他研究資料ニ供スベキモノ」と説明している。本来実務資料に過ぎなかった連合送付切手は、湯川により通信学徒への教育資料として活用の途が開かれ、さらに樋畑により、広く文化的価値を見出されたといえることができるだろう。前年の1897（明治30）年は古社寺保存法が制定された年だが、樋畑が連合送付切手の管理状況を憂慮し、その活用を訴えたことにも、文化財保護に対する時代意識の反映をみることができるかもしれない。

### 3 博物館における展示什器の変遷

以上に見たように、樋畑は1898（明治31）年の段階で、連合送付切手のうち4,000枚以上を「将来開設スベキ郵便博物館用」に確保した。それから4年後、1902（明治35）年に万国郵便連合加盟25年を記念して博物館が創立すると、連合送付切手はいよいよ展示公開に供された。湯川により東京郵便電信学校に移管された切手はあくまでも同校関係者の閲覧用であったが、郵便博物館の創設により、はじめて一般社会への公開が開始されたといえる。

その後当館では、このコレクションを継続的に公開していくため、時代に応じ理想的な展示什器を模索してきた。歴代の什器は「回転額」と「引き出し式ケース」に大別されるが、本章ではそれぞれの設置状況、導入経緯、構造上の特徴を検討することで、当館が資料保存と公開を両立するため、どのような工夫を重ねてきたかを明らかにしたい。

#### (1) 回転額（1902（明治35）～1922（大正11）年頃）

##### ①設置状況

1902（明治35）年の創立当初から1922（大正11）年頃まで、約20年間にわたり使用されたのが「回転額」と呼ばれる展示什器である。博物館はこの間、通信省旧庁舎から通信官吏練習所構内へと移転し、再び通信省新庁舎に戻るといふ慌しい状況を余儀なくされたが、いずれの展示場にもこの回転額が引き継がれ、継続的に使用された。

まず、1902（明治35）年の創立から約3年間、博物館が京橋区木挽町の通信省構内に置かれていた頃、連合送付切手は3台の回転額に収められ、東門脇新館の2階入口付近に展示された。当時の図面【図4】上では、左下の3つの円がこれにあたり、円の上には「郵便連合各国発行ノ郵便切手類ヲ沿革的ニ貼付シタル回転額」との記載が見られる。この什器は頂部に王冠のような装飾を備え、2段に区切られた切手貼込額が放射状に広がるもので、【図5】にその姿が確認できる。この最初期の展示については、「概して言へば善く揃ひたりとハ言ひ難し且つ望むらくハエビシ順又ハ五大州別にして順序好く保管されたき事なり」<sup>(27)</sup>と、資料の網羅性や分類方法に対し厳しい評価もあったものの、「全世界の郵券や端書やの各種ハ、其々国別にして洽く蒐集してあるのハ、世のフィラテリストが垂涎の種なるべく、夥多の観覧者中にハ、低回去る能はざるかの如き人々もあつた」<sup>(28)</sup>と、一定の注目を集めたことも報じられている。

25 田良島哲「明治後期における通信省から帝室博物館への切手類の寄贈」『郵政博物館 研究紀要』第6号、2015（平成27）年、2頁。また、同研究によるとこの寄贈は少なくとも1912（明治45・大正元）年まで継続された。

26 註54参照。

27 弥生山人「郵便博物館を觀る（中の下）」『東京朝日新聞』1902（明治35）年7月12日朝刊、2面。

28 「通信省内の郵便博物館」『読売新聞』1902（明治35）年6月24日朝刊、4面。

1905 (明治38) 年、郵便博物館は芝公園内の通信官吏練習所 (1907年より通信官吏練習所) 構内に移転し、その後約5年間は同地で運営された。移転当初、同所の「旧図書閲覧室」に設けられたという仮陳列所における展示状況は不明だが、1907 (明治40) 年6月の陳列所増築後には、本館右手に設置された「万国郵便切手類陳列室」に、7台に増加した回転額が確認できる【図6、7】。当時の『風俗画報』によれば、そのうち5台が1905年以前、2台が同年以後 [ママ] 発行の切手類に充てられ、さらに「欧羅巴、亜細亜…各国植民地」などの地域別に分けて展示されたという<sup>(29)</sup>。同誌はこれについて「郵便切手の蒐集は以前より熱心なる好事家あれども是は又外ならぬ役所の事とて世界各国は愚か一国一国に纏められ」<sup>(30)</sup>といると、その分類手法を含めて高く評価している。

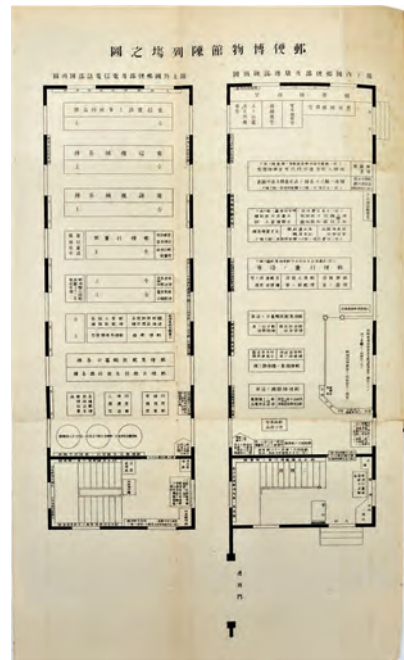
1910 (明治43) 年、「逓信博物館」に改称した当館は、新築落成した逓信省新庁舎内に戻り、以後約12年間はこの場所に落ち着いた。連合送付切手の展示には引き続き7台の回転額が使用され、遅くとも1916 (大正5) 年秋の展示替え以降は1階左側の「第三室」に設置された【図8、9】<sup>(31)</sup>。

これ以降、回転額の存在を示す写真や図面は確認されていないが、この陳列区分は1922 (大正11) 年3月の飯田橋移転までおおむね維持されており<sup>(32)</sup>、回転額もこの間使用が続けられ、その後廃棄されたと推測される。

## ②導入経緯

では、この回転額はどのような経緯で導入されたのだろうか。樋畑は後年、郵便博物館創立を振り返り、「独逸の郵便博物館の嚮に倣ひ回転式万国郵便切手蒐集額も創設した」<sup>(33)</sup>と述べている。

1872 (明治5) 年に開館したドイツ帝国郵便博物館 (Reichspostmuseum) では、1886 (明治19) 年から1939 (昭和14) 年まで、郵便切手類の展示のため【図10】のような回転額が使用されていたという<sup>(34)</sup>。



【図4】「郵便博物館展示場之図」  
(逓信省通信局『明治三十五年万国郵便連合加盟二十五年祝典紀念 展覧会出品目録』1902 (明治35) 年、折込図より)



【図5】「逓信博物館 [筆者註：郵便博物館] 陳列室 (郵便切手、他)、1902 (明治35) 年6月撮影 (WAB-7) より部分

29 橋本桔梗「郵便博物館」『風俗画報』第368号、1907 (明治40) 年8月、6頁 (復刻版、国書刊行会、1978 (昭和53) 年参照)。

30 上掲、6頁。なお、この文は「郵政博物館開かる」『東京日日新聞』1907 (明治40) 年6月23日朝刊、7面からの転載とみられる。

31 「逓信博物館の陳列替」『逓信協会雑誌』特別記念号、1916 (大正5) 年11月、88頁、逓信博物館『陳列品目録』1917 (大正6) 年3月末日調査、51-52頁。

32 前掲、『逓信事業史 第一巻』、719頁。

33 前掲、『日本郵便切手史論』、92頁。

樋畑自身は1911（明治44）年の欧米出張まで同館を訪れたことはないものの、日本とドイツのあいだでは遅くとも1880（明治13）年より郵便事業用品や絵画・模型などの資料交換が行われており<sup>(35)</sup>、1897（明治30）年には日本側の依頼により、ドイツを含む連合加盟各国から寄贈を受けている<sup>(36)</sup>。このような資料のなかに回転額に関する情報が含まれており、樋畑の着想源となったとしても不思議ではない<sup>(37)</sup>。また、郵便博物館創立以前に渡欧した関係者が資料を持ち帰り、樋畑に提供した可能性もあるだろう。1891（明治24）年にドイツ郵政局長シュテファン<sup>(38)</sup>の案内でドイツ帝国郵便博物館を視察した郵務局長・因藤成光（1856-?）や、1897（明治30）年にベルリンに滞在して通信事業調査にあたった先述の湯川寛吉は当館創設の支援者として知られており<sup>(38)</sup>、彼らが回転額に関する情報を樋畑にもたらしたかもしれない。

具体的な情報源は明らかにできなかったが、樋畑は何らかの方法でドイツ帝国郵便博物館の回転額について知り、あらたに開館する郵便博物館にも導入を決めたものと考えられる。なお、この什器の調達に関しては資料が確認されておらず、樋畑がこれを輸入したのか、あるいはドイツの例を参考に国内で調製したのかなど、詳細は不明である。

### ③構造上の特徴

では、この回転額にはどのような構造上の特徴がみられるだろうか。残された写真資料の観察から、以下の3点を指摘したい。

第一には開放性である。この回転額は18枚程度の切手貼込額が中心の軸から放射状に広がる構造で、切手は常に来館者の目に触れるようになっている。来館者はその周囲を歩きながら、展示された切手をおのずから総覧することができた。先述のとおり、



【図6】「郵便博物館雑誌掲載記事」、詳細不詳（WAB-3）より部分



【図7】「通信博物館陳列室の一部（郵便切手）」、1907（明治40）年撮影（WAB-9）

34 ベルリン情報通信博物館（Museum für Kommunikation Berlin）主席資料研究員のデイドズナイト博士（Dr. Veit Didczuneit）より情報提供を受けた（2021（令和3）年7月20日付私信）。

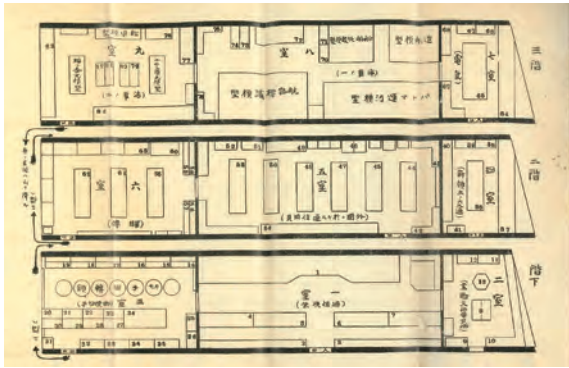
35 1880（明治13）年、駅通総官の前島密がドイツ特命全権公使のアイゼンテッヘルから依頼を受け、ドイツ帝国郵便博物館に出品するための資料約30種類を提供している（『雑報』『中外郵便週報』第1号、1881（明治14）年1月3日、3-4頁、井上卓朗「ドイツ（日耳曼国）郵便博物館に出品された『郵便取扱之図』、『郵便史研究』第29号、2010（平成22）年3月、24-27頁）。

36 前掲、『通信博物館75年史』、12頁。

37 当館には19世紀末にドイツ帝国郵便博物館で刊行された目録や平面図が少なくとも3冊伝存するが、いずれにも回転額の写真や図面は見られない（Carl Lindenberg, *Katalog der Marken-Sammlung des Reichs-Postmuseums*, Berlin: n.p., 1888（YBA-8）；Reichs-Postmuseum, *Katalog des Reichs-Postmuseums*, Berlin: Julius Springer, 1897（YBA-15）；Reichs-Postmuseum, Berlin: n.p., 1898（YBA-18））。

38 前掲、『通信博物館75年史』、14頁。





【図8】「陳列配置図」(『陳列品目録』折込図より、出典は註31参照)



【図9】「通信博物館 万国郵便切手部」、1917 (大正6)年撮影 (WAB-15)

これは博物館創立当初は壁際に設置されていたが、その後展示室の中央に並べて配置されるようになり、全方向からの鑑賞がより容易となった。

第二には軽量さである。この回転額は中心軸と切手貼込額から成るもので、線と面を組み合わせた比較的軽やかな構造体といえる。これは博物館創立当初、通信省旧庁舎の2階に設置され、またその後も度重なる移転を経験したが、この構造であれば数人で抱き抱えて運ぶことも可能であっただろう。

第三には装飾性である。回転額は頂部が華やかな王冠状に、脚部が優美な猫足にデザインされており、展示什器としての機能性を超えた美的趣味がうかがえる。

この回転額は博物館の展示室に常設されたが、1912 (明治45)年5月、皇太子嘉仁親王 (後の大正天皇) が通信省本省へ行啓した際には、郵便貯金局3階大広間において出張展示<sup>(39)</sup>も行われた。当時の写真【図11】には、広間中央に回転額2台がゆったりと配置されているのが確認できるが、その開放的な構造により、皇太子一行はあいだを縫うように通りながら、展示された切手を自然に目に収めることができたであろう。樋畑によれば、皇太子は展示品のなかでも「特に仏蘭西の切手に御眼を注」<sup>(40)</sup>がれたという。また、同じ省庁舎内とはいえ、博物館1階に設置されていた回転額を3階の展示会場まで移動でき



【図10】「ドイツ帝国郵便博物館 第15室」、レーマー (Willy Römer, 1887-1979) により1926 (大正15・昭和元年)年撮影 (3.2010.1292) © Museumsstiftung Post und Telekommunikation



【図11】「本省事業用品及参考品陳列室 (郵便貯金局大広間)」(『大正元年度 通信省年報 第二十七回』頁なしより、出典は註39参照)

39 通信大臣官房文書課編『大正元年度 通信省年報 第二十七回』通信大臣官房文書課、1913 (大正2)年、2-3頁。

40 前掲、『日本郵便切手史論』、198頁。

たのは、その軽量さに負うものである。さらに、これらは観葉植物と交互に配置され、優美な装飾性により空間に彩りを添える機能をも果たしている。

1902（明治35）年から1922（大正11）年頃まで使用された回転額は、その開放性、軽量さ、装飾性という特徴によって、切手の自然な観賞体験をさまざまな場所で可能にし、また空間を美しく演出してきたということができる。

## (2) 引き出し式ケース(1922(大正11)~1964(昭和39)年頃)

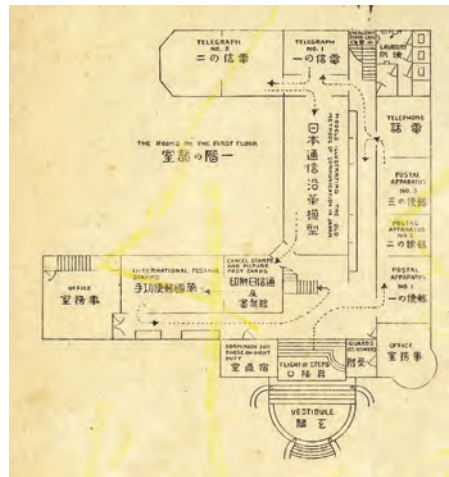
### ①設置状況

1922（大正11）年3月、当館は麴町区富士見町（現在の千代田区飯田橋）に移転し、これを機に連合送付切手用の展示什器は回転額から引き出し式ケースに刷新された。同ケースはその後仕様変更を繰り返しながら今日まで使用されているが、本稿では、博物館が再度移転する1964（昭和39）年頃までの状況を見ていきたい。

1922（大正11）年の移転当初、「万国郵便切手」は1階正面玄関を入れて左手に並ぶ3室のうち、中央の1室に展示された【図12】。やや時代は下るが、1931（昭和6）年の「通信博物館参観記」は、同室の展示について「呼物の外国郵便切手は、各国別に、抽出式額面に順序よく収められ、書棚に書籍を並べたやうに、背に把手と国名を見せて室の二側面に装置されてある。切手を見るには、希望の国名の額面を、把手を以て抽出すればよい、額は下方真鍮のレールの上を辻つて出て来る」<sup>(41)</sup>と概説し、「抽出式万国郵便切手陳列室」と題した図版【図13】<sup>(42)</sup>を掲載している。

その後1934（昭和9）年に大規模な陳列替えが行われると、郵便切手を展示する「第十二室」は正面向かって左端の室に移動した【図14、15】。1938（昭和13）年春には室名が「第十二室」から「第七室」に改められたが、1階左端という配置は変わらず、戦後まで維持された。

これが見直されるのが1952（昭和27）年の展示替



【図12】「通信博物館案内」、1922（大正11）年頃（8802-1295）より部分



【図13】「抽出式万国郵便切手陳列室」(『通信博物館参観記』15頁より、出典は註41参照)



【図14】「陳列配置図」(通信省編『通信事業史 第一巻』725頁より、出典は註14参照)

41 大柴峯吉「通信博物館参観記」『切手趣味』第4巻第1号（通信博物館特集号）、1931（昭和6）年7月、15頁。  
42 当館には【図13】と同一の写真資料「博物館々内」（WAB-48）が収蔵されるが、その保管票に記入された1938（昭和13）年との撮影年は誤りと考えられる。

えで、従来の部屋は書庫となり、代わりに1階玄関から直進した新「第六室」【図16】が切手展示に充てられた。これは1958（昭和33）年末には隣接する「第五室」にも拡張されており、当時の写真【図17】には、手前の第六室と奥の第五室に引き出し式ケースが隙間なく並べられているのが確認できる。

このように、飯田橋の通信博物館では1922（大正11）年から40年以上にわたり一貫して引き出し式ケースが使用された。この時代のもものは1964（昭和39）年11月の通信総合博物館（千代田区大手町）移転に伴い廃止されたが、代わりに新設計品が導入され今日に至っている<sup>(43)</sup>。

## ②導入経緯

では、この引き出し式ケースはどのような経緯で導入されたのだろうか。大柴峯吉は前述の「通信博物館参観記」において、「此様式は…なんでも樋畑先生が倫敦の大英博物館にあるものを参考として御考案になつたものであると云ふ」<sup>(44)</sup>と記している。この特集記事には樋畑も直接関与している<sup>(45)</sup>ことから、同記述は樋畑本人も了解したものであった可能性が高い。

大英博物館では、1889（明治22）年にタプリング（Tomas Keay Tapling, 1855-1891）によって寄贈された切手の一大コレクションを公開するため、1903（明治36）年より引き出し式の展示ケース【図18】が導入されていた。これは、大英博物館評議会より同コレクションの管理顧問を委任されていたベーコン（Edward Denny Bacon, 1860-1938）が、約4年にわたる試行錯誤の末に考案したものであった<sup>(46)</sup>。彼は当初、「サウスケンジントンの自然史博物館で蝶や蛾を展示するのに使用されているキャビネット」<sup>(47)</sup>【図19】<sup>(48)</sup>と同



【図15】「博物館々内」、1934（昭和9）年9月28日撮影（WAB-25）



【図16】「展示室配置図（昭和32年度末）」（『通信博物館75年史』118頁より、出典は註1参照）



【図17】「博物館々内」、1959（昭和34）年4月2日撮影（WAB-105）

43 前掲、『通信博物館75年史』、249頁、本稿註2。

44 前掲、「通信博物館参観記」、15頁。

45 当該の「通信博物館特集号」巻頭言には、「此特集号の目的が目的だけに…樋畑先生には長い御経験と深い御学識とを以つて種々御親切に御指導賜りました…」とあり、直接助言を仰いでいたことがわかる（前掲、『切手趣味』第4巻第1号、1頁）。

46 Richard Scott Morel, “The Formation, Development and Curation of the Tapling Collection at the British Museum Library in the Nineteenth Century”, *The Electronic British Library Journal*, 2021, Article 7, pp. 22-27. タプリングについては、正田幸弘「世界の大収集家（2）タプリング（1855-1891）」『月刊たんぶるぼすと』第44巻第3号、2020（令和2）年2月、9-12頁。

47 Edward Denny Bacon, “The Tapling Collection”, *The London Philatelist*, Vol. VIII, No. 95, November 1899, p. 285.

様の水平引き出し式ケースを構想していた。しかし、各額面を切手展示用に薄くすると、いっばいに引き出した状態で上方から力が加わった場合に折れかねないことがわかったため、引き出しを水平に重ねるのではなく垂直に並べる仕様に変更したという<sup>(49)</sup>。この発想の転換により強度の問題は解消され、さらに各額面の両面に切手を貼り込めるようになってケースの収容力も2倍に向上した。ペーコン自身、この引き出しの垂直化という思いつきは「とりわけ喜ばしいもの」<sup>(50)</sup>であったと誇らしげに記している。これまで、切手用引き出し式ケースは当館が考案したもののように漠然と捉えられる向きもあった<sup>(51)</sup>が、その発明の功績は大英博物館とペーコンに帰すべきであろう。

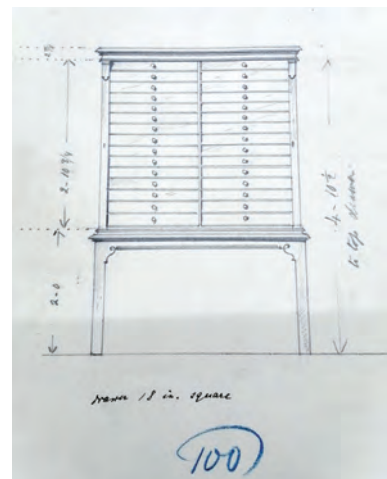
樋畑はその7年後、1910(明治43)年にロンドンで開催された日英博覧会に出席し、欧州各国を視察している。彼の紀行文には「倫敦のブリチシ」博物館を見学したことが示唆されており<sup>(52)</sup>、おそらくこの際に同館の引き出し式ケースを目にし、参考にしたものと考えられる<sup>(53)</sup>。

では、この引き出し式ケースはどのように調達されたのか。当時の写真をあらためて観察すると、同ケースには下部に傾斜した張り出し部分のあるもの【図13、15】と、全体が直方体をなすもの【図17】の2種があることがわかる。以下、これらを初代と二代目と呼び分け、それぞれの状況を見ていきたい。

まず、初代ケースについては、1921(大正10)年に樋畑が起案した「郵便切手格納筒調製ノ件」<sup>(54)</sup>と、翌1922(大正11)年に通信局技手の高城精一郎が起案した「郵便切手格納函補修ノ件」<sup>(55)</sup>という2件の起案文書が残る。前者には発注先に関する言及はないものの、後者にはこのケースの補修等を「原製作者長谷川篤」に依頼したいとの記述がみられ、添付の見積書には「東京市芝区琴平町二番地 長谷川篤…」のゴム印が押されている。芝は洋家具製造の一大拠点であり、『東京電話番号簿』<sup>(56)</sup>



【図18】「大英博物館(キングスライブラリー)のタプリングコレクション」、20世紀撮影 From the British Library's Philatelic Collections, Photograph Collection. © British Library Board



【図19】昆虫標本用什器のための素描(註48参照) From the collections of the Library and Archives, Natural History Museum, London. © The Trustees of the Natural History Museum, London

48 1875(明治8)年から95年までロンドン自然史博物館学芸員を務めた動物学者ギンター(Albert Charles Lewis Gotthilf Günther, 1830-1914)がまとめた資料集(“Miscellaneous documents”: letters, lists, memoranda and reports relating to the work of the department, gathered by Dr A Günther, 1857-1889, DF ZOO/202/1, p. 235)に収録される。ペーコンが参照したという什器は特定できなかったが、このような仕様であったと推測される。ロンドン自然史博物館(Natural History Museum, London)鱗翅目担当学芸員のジュスティ氏(Alessandro Giusti)、アーキビスト補佐のルーク氏(Kathryn Rooke)より資料提供を受けた(2022(令和4)年1月13日付私信)。

49 Edward Denny Bacon, “The Tapling Collection”, *The London Philatelist*, Vol. IX, No. 107, November 1900, p. 284.

50 Ibid., p. 284.

もこの人物の生業を「洋家具」と記載している。当時の地図<sup>(57)</sup>や業者名簿<sup>(58)</sup>に長谷川の名前は見られなかったが、同地の専門業者のひとつであったと考えられる。この初代ケースは、樋畑がかつて実見した大英博物館の例を参考に、国内の洋家具業者と相談しながら独自に調製したものだといえるだろう。

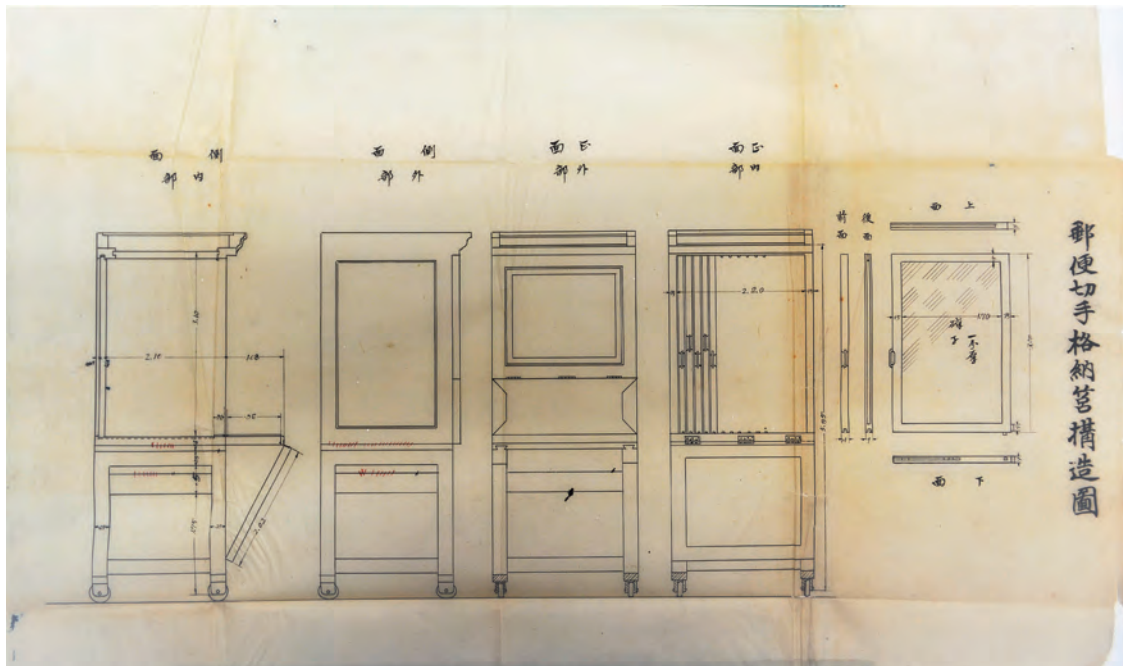
二代目ケースについては、1937（昭和12）年に陳列係の山本が起案した「郵便切手保管函購入ノ件」<sup>(59)</sup>という起案文書が残る。その鑑文には、発注先として「此種器具製作ニ対シテハ多年ノ経験ヲ有スル三菱商事株式会社又ハ東京鋼鐵工業株式会社 日本鋼鉄家具株式会社 横浜鋼鉄建□社 佐倉鋼鉄工業株式会社ヲ指命競争セシムルコト」とある。競争の結果は不明だが、この5社のいずれかが新仕様のケースを受注製作したことがわかる。

### ③構造上の特徴

それでは、これらの引き出し式ケースにはどのような構造上の特徴が見られるだろうか。初代ケースについては上述の「郵便切手格納筒調製ノ件」に仕様書と構造図面が添付されており、二代目については「郵便切手保管函購入ノ件」に仕様書が添付されている。なお、後者の仕様書にも「示図ノ通り…」などの表現が見られることから本来は図面も付属していたと考えられるが、伝存していない。以下、これらの文書と写真資料に基づき、引き出し式ケースの特徴として以下の3点を指摘したい。

第一には閉鎖性である。切手を貼り込んだ額面は通常本体に収納され、人目に触れないようになっている。初代ケースの仕様書と図面【図20】によれば、各ケースには切手貼込額が20枚収納され、1枚ずつ手前に引き出すことができた。図面左端の「側面内部」図には、ケース上部の底面から1.08尺（約30cm）の板が水平に張り出しており、この上面に設けられた真鍮製の「軌道」に沿って、引き出しが手前にスライドする仕組みとなっていた。なお、この初代では各額面は軌道に沿ってまっすぐ手前にしか引き出せなかったようだが、1937（昭和12）年発

- 
- 51 引き出し式ケースの起源については突き詰めた検討がなされてこなかったが、当館元館長の林健志氏が「通信総合博物館ができたときに「膨大な切手を」しっかり閲覧できる特別な展示方法を編み出した」と述べているなど、これが当館の考案にかかると思われるような記事等がしばしば見られる（半田昌之、田良島哲、林健志、井村恵美、井上卓朗「座談会 郵政博物館の開館に当たって」『通信文化』第25号、2014（平成26）年4月、7頁）。
  - 52 樋畑は帰路の寄港地エジプトで売られていた織画について、「倫敦のプリチシ、乃至ケンシレトン[ママ]博物館、巴黎のルーブル博物館にある様な木伊乃（ミイラ）の顔にあてたと云ふ雅致のある織物は、今では得られぬ」と感想を漏らしており、滞欧中これらの博物館を訪れたと推察される（樋畑雪湖「一萬二千海里汽船平野丸の航海（三）」『通信協会雑誌』第32号、1911（明治44）年3月、107頁）。
  - 53 なお、このケースを「独逸式」「ドイツ型」と表現した文献もみられるが、おそらく回転額の導入経緯と混同されたものと思われる（[文責在記者]「通信博物館を観る」『通信協会雑誌』第350号、1937（昭和12）年10月、109頁、笠井太慶喜「通信博物館の再開について」『切手文化』第31巻第5号、1948（昭和23）年2月、25頁）。
  - 54 「郵便切手格納筒調製ノ件」（博683号、1921（大正10）年12月19日決裁）、『文書綴』大正11年（ALA-10）収録。
  - 55 「郵便切手格納函補修ノ件」（博987号、1922（大正11）年4月21日決裁）、『文書綴』大正11年（ALA-10）収録。
  - 56 東京中央電話局『大正十一年四月現行 東京電話番号簿』1922（大正11）年、85頁。
  - 57 「震災前の赤煉瓦通りを中心とする芝家具街の主要店」（折込地図）、俵元昭編『芝家具の百年史』東京都芝家具商工業協同組合、1966（昭和41）年、162頁。
  - 58 「家具商」、東京市商工課編『最近東京市商工名鑑』地涌学会出版部、1924（大正13）年、305-308頁。
  - 59 「郵便切手保管函購入ノ件」（博第408号、1937（昭和12）年8月10日決裁）、『昭和十六年起 切手類関係綴』（ALA-101）収録。先に購入した引き出し式ケース10台に切手が収納しきれなくなったため、若干の仕様変更を加え新たに5台を購入してよいか何う内容。当初発注した際の起案文書は確認されていない。なお、同ケースはその後も追加配備され、1958（昭和33）年末には42台に達していたという（前掲、『通信博物館75年史』、119頁）。



【図20】「郵便切手格納筐構造図」(出典は註54参照)

注の二代目では、額面の「滑出後ハ移動支棹ニヨリ自由ニ回転」できるよう仕様変更がなされた。【図21】には、右手の男性がケースから引き出した額面を写真奥側に傾けて観賞している様子がみられる。

引き出し式ケースの閉鎖性としては、初代・二代目ともに、必要に応じ前面を遮蔽できる構造を有していたことも特筆される。初代ケースについて図面左端の「側面内部」を見ると、引き出しの軌道となる水平張り出し部分から本体脚部に向かって、2.02尺(約60cm)の板が斜めに延びている。仕様書に説明はないが、その右隣の「側面外部」図を見る限り、この水平張り出し部分を本体前面に折りたたみ、さらに斜めに渡した板をその上方に収めることで、ケース前面を完全に板で覆うことができたようである。右隣の「正面外部」図は、この閉じられた状態を正面から描いたものであろう。このような遮蔽機能は二代目ケースにも踏襲された。ただし、初代は頂部から脚部まで一体の構造であったのに対し、二代目は上下部を分離することのできる「重ネ戸棚」に仕様変更されたため、開閉の仕組みも大きく見直されている。仕様書によれば、額面を収容する「上部戸棚」の「頂部及底部」には「差込ミ式二枚張り扉」が収容されており、ケースを閉じる際にはこの2枚を引き出して前面を覆ったようである。【図22】には、上部戸



【図21】「博物館々内」、1939(昭和14)年10月25日撮影(WAB-54)



【図22】「博物館々内」、1939(昭和14)年10月25日撮影(WAB-53)

棚の頂部に薄い板が手前にわずかに飛び出しているのが見られるが、おそらくその中央に付属する取手を手前に引くことで内部に収納されていた「差込ミ式…扉」の1枚が出現し、これを引き下ろしてケース前面の上半分を覆うことができたものと思われる。また、底部からも板が飛び出しているが、これも一度手前に引き出してから上方に引き上げることで、ケース前面の下半分を覆うことができたものと推測される。この底部の板には裏側に小さな半円がのぞいているが、これはおそらく仕様書の指定するグレモン錠で、ケース前面を2枚の扉で覆ったのち、施錠に用いられたものと思われる。時代は下るが、1960 (昭和35) 年撮影の【図23】には、奥から6番目と7番目のケースにその遮蔽された状態を見ることができる。これらは中央につき目のような水平の線が見られ、頂部から引き下した板と底部から引き上げた板の2枚で覆われていることがわかる。



【図23】「博物館々内」、1960 (昭和35) 年4月28日撮影 (WAB-116) より部分

引き出し式ケースは、切手貼込額を収納できること、必要に応じ前面を遮蔽できることにおいて、閉鎖的な構造を有しているということができる。

第二に、このケースの特徴として重厚さを挙げたい。回転額が軽やかな線と面から構成されていたのとは対照的に、引き出し式ケースは初代・二代目ともに、重量感のある直方体を基本とした構造となっている。初代ケースは木製であったが、仕様書によれば「外部及脚等」をケヤキ材、「切手貼込枠」をヒノキ材とするよう材質の指定がある。基本材として指定されたケヤキは、当時より「堅クシテ木理正シク孔環ノ幅狭シ」「繊維強ク割レヲ生ゼズ伸縮少ク」と説明され、「役所向即チ丈夫向ナリ」と、その堅牢さが高く評価されていた<sup>(60)</sup>。「切手貼込枠」の用材として指定されたヒノキは下等材に分類されているが、その軽量さは自在に引き出す必要には適っていたであろう。初代ケースは木材を巧みに使い分け、重厚な本体に軽量の額面を収納するという構造をとっていたことがわかる。さらに二代目ケースでは、その主要材質を見直し、より頑丈なスチール製へと切り替えた。仕様書は、鋼板を切断圧搾のうえ電気または酸素溶接により組み立てるよう指定している。日本では、1923 (大正12) 年の関東大震災を受け、翌年から東京鋼鐵家具製作所がはじめてスチール家具の工業生産に着手していた。当館がこの二代目ケースを発注したのと同じ1937 (昭和12) 年には、東京帝室博物館が同製作所からステンレス製展示ケース30万円分を購入したという<sup>(61)</sup>。当館も国内におけるスチール家具の浸透を受け、時流に遅れることなくこれを採用したといえる。なお、後年の資料はこのケースを「一個約百貫 [375kg]」<sup>(62)</sup>と見積もっており、その量塊感がうかがえる。また、これらは厳重な施錠も可能であったようで、初代には「裏面ノ扉ニハ堅牢ナル錠前」、二代目には上下部戸棚それぞれに「堅牢ナル『グレモン』ヲ付シ之レニ要スル『ロック』ハ合鍵ナキ特種錠」を備えることが指定されている。

第三に、このケースの特徴として簡素さを挙げたい。回転額が王冠状の頂部や猫足の脚部に曲

60 農商務省山林局編『木材ノ工芸的利用』、大日本山林会、1912 (明治45) 年、327、330頁。

61 「創業90周年 日本ファイリングのあゆみ 第1回 日本初のスチール家具生産と市場の形成」『Better Storage』第192号、2014 (平成26) 年1月、頁なし。

62 「博物館新築促進要項」1957 (昭和32) 年頃、文書綴『参考資料 博物館部会』(未登録) 収録。

線的な装飾性を見せていたのとは対照的に、引き出し式ケースは直線的で簡素な構造を特徴としている。初代ケースは手前に張り出した板が外観に抑揚をもたらしているが、純粋な装飾的要素としては頂部にモールディング(彫形)を施すにとどまっている。これを調製した樋畑は、1911(明治44)年の洋行の際に滞在したホテルについて「室内器具の形式は、欧大陸では多く直線や曲線をあつさりつけたのが流行してゐるらしい」と述べ、【図24】のような挿図を紀行文に載せている<sup>(63)</sup>。欧州ではアール・デコの萌芽が見られたこの時代に、樋畑がいち早く簡潔な装飾様式に着目していたことは興味深い。帰国後10年を経てはいるが、このような経験がケースの意匠に影響を与えた可能性もあるだろう。さらに二代目では初代の複雑な開閉構造を廃し、2つの独立した直方体を組み合わせた「重ネ戸棚」としたことで、よりすっきりと機能的なデザインに落ち着いている。



【図24】 欧羅巴の旅館の設備(「初心談」138頁より部分、出典は註63参照)

なお、これらのケースは簡素な構造を特徴としながらも、その外観が無味乾燥なものとならないよう工夫されていた。初代ケースの主要材に用いられたケヤキは、堅牢な反面「木理材色一様ナラザル」<sup>(64)</sup>という欠点を有していたため、仕様書はその仕上げを「黒漆塗」とするよう指定している。また、二代目の仕様書も、スチールには十分な目止めと研磨を施し、「楡目色エナメル焼付」で仕上げるよう指示している。日本博物館学の父と称される棚橋源太郎(1869-1961)は戦後、「美術品を収容するケースの如きは、陳列品とよく調和して、簡素でしかも雅致に富んだものであらねばならぬ」と述べ、「本邦では鋼鉄の骨組を、マホガニ材の少し濃い色に仕上げるのを見受ける」と記している<sup>(65)</sup>が、この二代目ケースもそのような一例といえるだろう。当館の引き出し式ケースは簡素さを基調としながら、展示空間や資料との調和にも配慮されたデザインがなされていたことがわかる。

以上に、引き出し式ケースの特徴として閉鎖性、重厚さ、簡素さを挙げた。これは従来の回転額と対照的な特徴をなすものだが、なぜこのような仕様が採用されたのだろうか。最後にその理由として、資料保存と空間の有効活用に対する意識の高まりを指摘したい。

資料保存の観点からは、第一に防退色への意識を上げることができる。初代ケースを調製した樋畑は、その必要な機能の筆頭に、切手の「保存、防退色」を挙げている。当館の創立から20年にわたり、回転額に貼り込まれた切手は常に露出し、光にさらされていた。特に1907(明治40)年から約3年間は、「万国郵便切手類陳列室」の窓から直射日光を浴びており【図7】<sup>(66)</sup>、1910(明治43)年の移転後も、複数のペンダントライトによる人工照明にさらされていた【図9】。切手は本来「光に非常に敏感」<sup>(67)</sup>な資料であり、このような展示環境において退色はま

63 樋畑雪湖「初心談」『通信協会雑誌』第30号、1911(明治44)年1月、138頁。

64 前掲、『木材ノ工芸的利用』、129頁。ケヤキ材は「塗り上り善く鉋境ヲ生セズ」と、平滑な塗装には適するとされた。

65 棚橋源太郎『博物館教育』創元社、1953(昭和28)年、98、105頁。

66 当館が仮陳列所に利用した東京郵便電信学校の「旧図書閲覧室」(註22参照)は「本館の南にあたり、その前は運動場で、青々とした牧草が生え茂り…高い窓からはいつも風が吹き込んで涼気が溢れる」環境にあったという(前掲、『通信教育史』、152頁)。

67 「屋内照度基準 照明学会・技術規格JIES-008(1999)」に基づく分類で、切手展示の推奨照度は50lx、年間積算照度は120,000lx・h以下とされる(吉田直人「光による資料への影響の抑制と白色LED展示照明の現状について」『文化財の虫歯害』No. 76、2018(平成30)年12月、23-24頁)。



ぬがれなかったであろう。おそらく樋畑は切手が年々退色していくさまを目の当たりにし、その危機感から閉鎖的構造の引き出し式ケースを導入したと考えられる<sup>(68)</sup>。

第二に、防犯意識の高まりも指摘したい。樋畑は管理上必要な構造として「取締、展回 [ママ] 等堅固ノ構造」を挙げているが、その背景には盗難への懸念があったと推測される。時代は下るが、当館では実際に切手の盗難事件が少なくとも1930 (昭和5) 年と1940 (昭和15) 年に2件発生している。1件目は『読売新聞』に報じられたもの<sup>(69)</sup>で詳細は不明だが、2件目については当館に「物品亡失認定ノ件」<sup>(70)</sup>と題された詳しい報告文書が残る。これによれば、1940 (昭和15) 年の初夏、切手愛好者を装った犯人が数次にわたって切手貼込額のネジを徐々に抜き取り、展示室内に人の少ない瞬間を狙って仏領オボック発行の三角切手5枚を窃取したという。陳列係長の酒井務は、このケースが「堅牢ナル鉄板製格納函」であること、各切手貼込額のガラス板はネジ20数本で堅固に留められていること、切手の閲覧後は額を収納する構造であることから、「尋常ノ手数ニテハ窃取不能」と述べ、「従来切手陳列容器ニ関シテハ多大ノ注意ヲ払ヒ種々研究」していただけに「今回凶ラズモ官物ヲ失ヒ国ノ損失ヲ招キ誠ニ遺憾恐懼ニ堪ヘス」と悔しさをにじませている。不幸にもこのような事件が生じている以上、引き出し式ケースは防犯上完璧な機能を備えていたとはいいがたいが、この文書からは博物館が盗難の危険性を十分に認識し、これを防ぐために閉鎖的構造や重厚さを備えたケースの設計改良に心血を注いでいたことがわかる。

第三に、防災対策としての意識を挙げたい。当館は1923 (大正12) 年の関東大震災で被害を免れたが、このとき多くの博物館が罹災し文化財が失われたことは、関係者に少なからぬ危機感を与えたい。1926 (大正15) 年には樋畑を中心に博物館の移転や再建を目指す「通信文化保存運動」が起こされており、これを報じた新聞にも「辛うじて焼け残った通信博物館」が依然として耐震耐火設備の不十分な木造建築物にあることは遺憾との主張がみられる<sup>(71)</sup>。結果的に博物館の移転は1964 (昭和39) 年まで実現しなかったが、展示什器を重厚で耐火性に優れたスチール製へと切り替えたことは、防災対策として講じることのできる限られた措置のひとつであったであろう。

最後に、この引き出し式ケース導入の背景には、空間の有効活用という差し迫った必要もあったはずである。当館の切手総収蔵枚数は1913 (大正2) 年に1万6,500余枚であったが、初代ケースが調製された1921 (大正10) 年には4万5,000余枚、二代目ケースが追加発注された1937 (昭和12) 年には18万6,000万余枚に達している<sup>(72)</sup>。限られたスペースになるべく多くの資料を展示するためには、閉鎖的で稠密度が高く、余計な装飾を排した構造を採用することが不可避であったであろう。

樋畑は、当局に長年死蔵されていた連合送付切手の一部が糊着、毀損、虫害などにより失われたことを知っていただけに、博物館移管後の展示環境には最大限の注意を払ったものと思われる。また、膨大な切手を適切に公開し続けるには、空間の有効活用が急務であることも早くから認識していたであろう。このような意識は樋畑が1923 (大正12) 年に主任職を退いた後も、

68 大柴はこのケースについて、「切手を直接光線にあてないから褪色の慮なく…誠に理想的である」と、樋畑のねらいを適切に汲んだ評価を与えている (前掲、「通信博物館参観記」、15頁)。

69 通信博物館の「郵便切手其の他通信省で作った印紙等古い珍品数十点価格三百円」が盗まれたため、通信省が所轄署に被害届を出した旨が報じられている (『通信博物館の盗難』『読売新聞』1930 (昭和5) 年10月20日夕刊、7面)。

70 「物品亡失認定ノ件」(博37号、1941 (昭和16) 年2月5日決裁)、『昭和十六年起 切手類関係綴』(ALA-101) 収録。

71 「通信博物館の改築運動 貴重なる通信文化史料の保存のために 山県公爵等援助の下に」『東京日日新聞』1926 (大正15) 年7月19日朝刊、7面。

72 前掲、『通信博物館75年史』、413頁。

博物館職員により共有され、受け継がれてきた。引き出し式ケースの閉鎖性、重厚さ、簡素さという特徴には、資料を安全に守り公開していくという意志の結晶をみることができる。

明治期に導入された回転額がドイツ帝国郵便博物館に、大正期に調製された引き出し式ケースが大英博物館に範をとったものであることは、かつて当館が海外博物館の取り組みから積極的に学んでいたことを示している。また、回転額から引き出し式ケースへと大胆な切り替えを図り、さらに昭和期にその改良を重ねたことは、先人たちが運営上のさまざまな課題に向き合い、試行錯誤のなかでより良い展示を志向していたことを物語っている。展示什器の変遷には、資料の保存と公開という博物館の相矛盾する使命に対し、当館がたゆまず挑戦を続けてきた軌跡をみることができる。

## おわりに

本稿では、1878（明治11）年より万国郵便連合から送付される外国切手はそもそも真贋鑑定用の実務資料に過ぎなかったこと、これに対し19世紀末に湯川寛吉や樋畑雪湖がその教育的、文化的価値に着目して広く活用を企てたこと、1902（明治35）年以降は、博物館がその公開のために理想的な展示什器を模索してきたことをみた。

2022（令和4）年は、日本郵便株式会社の目時政彦氏がアジアで初めて万国郵便連合の事務局長に就任した記念すべき年である。当館に収蔵される連合送付切手は、わが国が1877（明治10）年の連合加盟以来、国際的枠組みのなかで各国と協調してきたことの証であり、「切手類を発行し管理監督する省庁（逓信省、郵政省）として形成された…いわば日本の国としてのコレクション」<sup>(73)</sup>としての側面を有している。2014（平成26）年の移転に際しては、引き出し式ケースを用いた切手の常設展示を全廃する構想もあったと聞くが、その社会的価値に鑑みれば公開を継続する意義は大きいのではないか。今後も館史の歩みを検証しながら、その価値にふさわしい活用の道を模索していきたい。

## Acknowledgements

I would like to show my gratitude to Veit Didczuneit, Head of Collections (The Museum for Communication Berlin), Richard Scott Morel, Curator of the Philatelic Collections (The British Library), Alessandro Giusti, Curator of Lepidoptera Collections and Kathryn Rooke, Assistant Archivist (Natural History Museum, London), who have generously shared their knowledge and provided material for illustration.

## 凡例

本文、註、図版キャプションに記載した「アルファベット3文字-数字1～3桁」（【図12】は「数字4桁-数字4桁」）は、郵政博物館の資料整理番号を示す。

（くらち のぶえ 郵政博物館学芸員）

73 高橋宣雄「郵政資料館所蔵切手類資料の評価」『郵政資料館所蔵資料 資産価値評価報告書』、エイアイエス株式会社トータル・アーツ、2007（平成19）年、41頁（ALA-246、非刊行）。